

のふくさ灰にて廻り炭は成がたし。

〔客之次第〕一立炭は多分は亭主炭持て出で入るもあり、又客より、とても御事に立炭被遊候へと云もよし、亭主は炭の用意も無御座候、今少御くつろぎ有て、御あそび被成候へと云時宜なり、客いかに御用意の無御座事の候はん哉、只被遊候へと、再三にこふ物なりもちろん用意えたる事なれば、則亭主炭せられれば、そこ御とり候へと、ろのその火をとらせておかせ物なり、扱炭をおかる、時、各さし寄て見物すべし、又亭主炭持て出で、客にちと御慰に炭被遊候へと所望あらば、再三えんしやく有べし、客めいよの數寄しやなどにて、慰にいれんとおもはれ候は、さればいれ申べきかとはいわぬ物なり、まづ釜をあげさせられよと云なり、是則いれんとすき道のことはなり、扱亭主釜をあげて、炭所望の時客すみ入べし、客大名か數寄無雙の人ならば、御相伴の中より、御取合を申などして、まづ釜をあげさせられよと、相伴衆一人云もよし、一炭の後、釜を客かくる事もあるべし、又立のき亭主に釜はかけさするもよし、亭主は炭に見入て、釜いつまでもかけぬ體よし、然間炭の後、亭主に向て釜かけさせられよと云時宜、尤ある義なり。

〔茶道織有傳上〕客入の大體

扱道具見仕廻亭主に今一度御炭拜見申度とのぞむべし、又その時上客の數寄こうえやあらば、客にのぞみたるもよし、客心得たるとあらば、そことり、火箸ほうろく持出火箸にかゝる火は火箸にて取、こまかなる火は、そことりにてすくいあげ、中ほどに少火をのこし、そことりほうろくを勝手へ入扱あしうちに紙をまき、すみくみて持出、亭主はわきへのき居る也、すみする人大目へ廻り炭する也、客同前に亭主もうち寄見る也。

〔草人木上〕右の禮儀過て、客歸宅の由を申べし、其時に亭主、各御隙いらすば薄茶申べきといふ、客